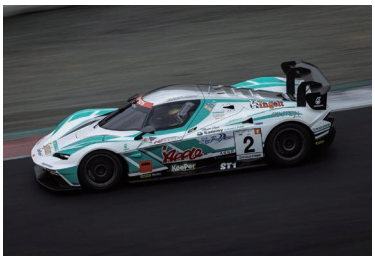
QUALIFY

OCTOBER 21［SAT］FINE / WET-DRY

10 月 21 日（土）のフリー走行は、事前の天気予報では晴天だったものの、どんよりとした曇り空で行われた。ただその後、当初の予報にはなかった雨が降り出し、一時強く降ったことから、路面はウエットコンディションとなってしまった。

その後すぐに晴れ間も出たことから、急速に路面が乾いていく難しいコンディションだったが、5分遅れでスタートしたAドライバー予選で井田が1分35秒013という好タイムを記録。「タイヤをうまく温められました」とST-X車両をも上回るタイムを記録する。

今回の公式予選はテスト的な要素を含み、通常とは異なりAドライバー予選の後、Cドライバー予選、Dドライバー予選が行われた。Cドライバー予選では高橋が1分38秒041、さらにDドライバー予選ではこの週末初めてドライブした吉本大樹が走り、1分36秒609を記録した。午後4時25分から行われたBドライバーに出走した加藤は、すっかり乾いた路面のなかで1分34秒289を記録。合算で #47 アストンマーティンを上回り、クラスポールポジションを獲得した。



RACE

OCTOBER 22［SUN］FINE / DRY

迎えた10月22日（日）の岡山国際サーキットは秋晴れとなり、午後1時30分からグループ1の決勝レースを迎えた。今回もスタートを務めたのは井田だ。

1周目、井田は #47 アストンマーティンの先行を許してしまうと、その後ややペースに苦しみ、少しずつギャップを広げられていってしまった。この岡山では #47 アストンマーティンのペースが良く、その差は20周を終えると9.569秒に。とはいえ、ここでいかに差を保つかがレース後半に繋がってくる。井田は必死の走りで10秒以内にギャップを保ったまま、#47 アストンマーティンを追っていった。

井田は1時間10分以上の長いスティントをしっかりと走り切り、#47 アストンマーティンの1周後となる40周を終えてピットインを行う。ここで高橋にステアリングを託したが、#47 アストンマーティンはピット作業に時間がかかったことから、この間に高橋は #47 アストンマーティンを先行してみせる。

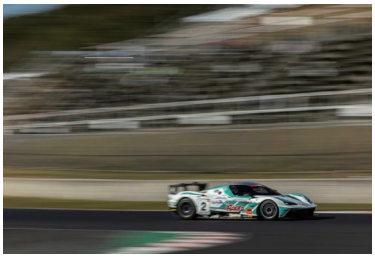
ただ、井田が序盤苦しんだのと同様、その後の高橋のペースが厳しい。「今日は良くなかった」と高橋が悔しがったように #47 アストンマーティンにふたたび先行を許してしまうと、その差が拡大してしまった。

高橋はその後も粘りの走りを続け66周までこなしピットインすると、加藤に最後のスティントを任せた。一方の #47 アストンマーティンもアンカーにジェントルマンドライバーを起用するかと思われたが、展開もあってかDドライバーのプロを起用。さらにタイヤ交換を行わず、『勝ち』を狙う作戦を敢行してきた。

残り50分を切って、クラス首位は #47 アストンマーティン、そして2番手には24.490秒差で加藤が駆るシンティアム アップル KTM。加藤がどれほどギャップを縮めていけるか……!?　レースは終盤に向けて息詰まる展開となっていった。

加藤はジワジワとそのギャップを縮めていき、3時間レースの残り30分となったところで、その差は10秒を切っていく。ストレート1本分だ。

その差を一気に縮めていった加藤は、残り23分となる94周目、ズバリと #47 アストンマーティンオーバーテイクする。ただこの頃、#47 アストンマーティンはパワステにトラブルを抱えており、その後ガレージインしてしまったことから、シンティアム アップル KTM の優勝が確定することになった。

最終的に #47 アストンマーティンがチェッカーのみを受け2位でフィニッシュしたことで、チャンピオン決定は最終戦に持ち越された。

完走すれば王座という優位で最終戦に臨めるが、チームは勝ってタイトルを決めるべく、全力を尽くす。